©日本記者クラブ 2023

日本記者クラブ会報

公益社団法人　日本記者クラブ　〒100－0011　東京都千代田区内幸町2－2－1　日本プレスセンタービル　TEL. 03－3503－2722　https://www.jnpc.or.jp/



休止の間に

イスラエルとハマスの戦闘休止の間に、ガザ地区北部から南部へ向かうパレスチナの人々=11月27日、EPA時事

この1年の終わりにそっと思う 時をへて変わらぬもの、変わる人

O・ヘンリーの『20年後』という作品は、たしか高校の英語の授業で読んだ。20年をへて変わらぬ思い、変わる人。ほんの数ページに、そうした時の移ろいのはかなさが、きゅっと詰まっていた。

さて、1985年10月号の記者クラブ会報をホームページからたどってみよう。この年に起きた日航機墜落事故に絡み、圧力隔壁破裂を特報した毎日新聞の「ワーキングプレス」がある。「写真回廊」は「ロス疑惑」の逮捕だった。当時の会報の花形「とっておきの話」はいま「書いた話　書かなかった話」に姿を変えた。「会見リポート」は、当時「クラブゲスト」として掲載されていた。そうしてみると主な構成は、大きく変わってはいないように思える。

38年前の会報を繰ったのは、「アレのアレ」の痕跡を探したからだ。リーグ優勝すら決まっていない段階のこの10月号に、なぜか記事はあった。阪神甲子園駅で、一人ひとりに「六甲おろし」を歌わせて「踏み絵」を踏ませる阪神ファンの狂乱ぶりを、スポーツ紙のトラ担当が書いている。「一歩間違えば恐ろしいことになる」と記している。

38年の時の経過を思う。その年に新聞社に入った記者は、新聞記者人生を終え、38年前にはなかったこのコラムを書いている。白状すれば38年前は阪神ファンではなかった。遠からずトラ色に染まり、過大な期待と諦念と、屈折した小さな喜びを多とする日々を過ごすことになろうとは。遠い、遠い「アレのアレ」を待ちながら。

（専務理事　江木慎吾）

記者会見から振り返る1年
「処理水」「ジャニーズ」に注目

企画委員長　藤井　彰夫

２０２３年がもうすぐ終わる。猛威をふるった新型コロナウイルスは、５月には感染法上の扱いが季節性インフルエンザと同じ５類に移行した。多くの人々がマスクを外し、外食に出かけ、外国からの訪日観光客も戻ってきた。

■記者の会場参加が回復

日本記者クラブではコロナ禍が拡大した２０２０年から、記者会見にオンライン併用方式を取りいれたが、23年はコロナ禍収束とともにリアル会場への参加が回復してきた。

本稿執筆時点（11月下旬）で２０２３年に最も参加者が多かったのは、７月４日のラファエル・マリアーノ・グロッシ国際原子力機関（ＩＡＥＡ）事務局長の記者会見だ。東京電力福島第一原子力発電所の処理水の海洋放出の前提条件の一つの調査報告書を岸田文雄首相に提出した直後とあって、会場では１１９人、オンラインでは２５８人、合計で３７７人が参加した。グロッシ事務局長は７日に訪日を終え総括する会見も行い、これも参加者は２４６人（会場１０１人、オンライン１４５人）と今年４番目となった。

参加者数が２番目に多かったのは、８月４日の国連「ビジネスと人権」作業部会のメンバーによる記者会見だ（会場１０７人、オンライン１６９人、合計で２７６人）。各国の人権状況を調査して報告する同作業部会は、日本の女性や性的少数者、障害者、外国人の人権状況を全般に調査した。その中には大手芸能事務所ジャニーズ事務所での性加害の被害者へのヒアリングも含まれていた。記者会見でも質問は「ジャニーズ問題」に集中した。この会見の直後には、「ジャニーズ性加害問題当事者の会」のメンバーによる会見も開かれ、２１６人（会場１４８人、オンライン68人）と今年５番目になる参加者を集めた。



ラーム・エマニュエル駐日米国大使の会見で司会を務める藤井企画委員長（右、2月15日）

「ジャニーズ問題」については３月に英ＢＢＣがドキュメンタリー番組で取り上げるまでは、多くの日本メディアは報じず、その責任を問われることになった。この反省も踏まえ日本記者クラブでは６月から「ジャニーズ問題から考える」というシリーズ企画をはじめ、メディアのあり方などについても記者会見で議論が交わされた。

重いニュースの会見が上位を占めるなかで、明るいニュースで参加者が多かったのが、３月のワールド・ベースボール・クラシック（ＷＢＣ）で監督として日本を優勝に導いた栗山英樹氏の会見だ。参加者は２５８人（会場１６０人、オンライン98人）で今年３番目となった。このほか６月13日には、５月のカンヌ国際映画祭でヴィム・ヴェンダース監督の「パーフェクト・デイズ」で主演し男優賞を獲得した俳優の役所広司さん、共演したダンサーの田中泯（みん）さんの記者会見も開いた。

■ガザでの衝突にも即応

新型コロナウイルスの感染爆発、ロシアのウクライナ侵攻などここ数年は、衝撃的な出来事が続き、日本記者クラブの記者会見でも何度も取り上げた。２０２３年は10月に入りハマスのイスラエル攻撃に端を発したガザ地域での紛争という新たなニュースが発生した。当クラブでは直後から、駐日イスラエル大使、駐日パレスチナ大使、日本赤十字社職員によるガザ報告などの記者会見を相次いで開いた。

コロナ禍が収束し記者会見場に記者たちが戻ってきた。２０２４年はさらに、会場での活発な記者会見を期待したい。そして願わくば、なるべく明るい話題の多い記者会見が増える世の中になってほしい。

（ふじい・あきお　日本経済新聞社専務執行役員論説委員長）

上半期の事業を理事会に報告
会見参加平均84人、件数は減

11月15日に理事会があり、今年度上半期の事業、決算、ならびに年度の決算見通しについて事務局から報告した。事業の中の記者会見の特徴は三つ。前年度に比べ件数が減ったこと、1件あたりの出席記者が増えたこと、そして会場を訪れる記者の比率が上がったことだ。

上半期の記者会見と記者ゼミの件数は87件で、前年同期より10件減った。事務局として特に意識して件数を減らしたことはないものの、結果的にペースダウンした。

会見あたりの出席者は平均84人だった。目標に掲げてきた80人を超えたことはよかった。出席者が200人を超える会見がこの間に4件相次いだことが大きく影響している。このように世間が注目し、したがって記者も多く集まる会見をいかに開いていくかが大事なポイントになる。

会場出席率が上がってきたことも明るい材料だ。コロナ禍を機に、リモートですべての記者会見に参加できるようにしたことは、全体の参加人数を押し上げたが、会場に足を運ぶ人は逆に減った。昨年度には3割程度だったその会場参加率が今年度上半期は4割に達した。

コロナの感染状況をみながら企画してきた記者研修会は4年ぶりに8月に実施した。会場とリモートの双方で参加できる方式で2日間、若手記者を中心に約60人が参加した。1日目の研修終了後には懇親会を開き、取材や記者生活の悩みや疑問を講師とともに語り合った。

5月30日には今年度の日本記者クラブ賞・同特別賞の贈賞式・記念パーティーを4年ぶりに開き、約90人が参加した。日本記者クラブ賞はTBSテレビ常勤監査役の西野智彦さんに、特別賞はRSK山陽放送「RSK地域スペシャル・メッセージ」取材班と、免田事件資料保存委員会に贈った。

半期の決算、255万円赤字 後半頑張りで収支均衡目指す

上半期の経常収益は約1億6710万円、経常費用は約1億6970万円で、約255万円の赤字だった。今年度は、コロナ禍以前に比べ、事業収益がどの程度戻るのかが試されると考えている。この間、人々の行動パターンは変わり、コロナ前に完全に戻ることや、逆に上回るような事態にはならないとも想定、コロナの影響を受ける前の2018年度の数値を参考に、事業収益の柱である貸室収入で85%、レストランアラスカに運営を委ねている会員用レストランの売り上げの一部を還元してもらう「飲食割戻金」で65%の予算を立てた。前年度の動向を考えると、野心的な予算と言える。

上半期でみると、特に貸室収入は予算とは開きがある。1年を通した見通しも事業収益全体で予算に比べ630万円のマイナスとなる見通しだ。収益全体の8割以上を占める受取会費も、会員の減少が止まらず、年度見通しでは予算を250万円下回る水準にとどまる。

一方、経常費用については、プレスセンタービルの共益費の値上げが上半期の終盤にあったことから、補正予算を組まなければならなくなった。ただ、年度を通じて経常費用全体を予算より1000万円程度低く抑えられる見通しで、全体として収支均衡を目指すことのできる範囲にあると考えている。（江木）

目次

▼2023年を振り返って　企画委員長　藤井彰夫　2
▼地元紙記者が選ぶ地域ゆかりの一冊　4▾5
▼今月のクラブゲスト　6
▼会見リポート　川瀬佐知子　大阪赤十字病院看護部集中治療室看護係長、佐藤展章　日本赤十字社事業局国際部次長／国分良成　慶應義塾大学名誉教授／ケント・カルダー　ジョンズ・ホプキンス大学教授／榊原英資　元財務官、インド経済研究所理事長　6▾8
▼試写会　8
▼ワーキングプレス　イスラエル・ハマス衝突　TBSテレビ　烝場聖治　9▾10
▼性別変更手術要件　違憲　共同通信社　帯向琢磨　11
▼新・列島報告　兵庫県　阪神タイガース　38年ぶり日本一　神戸新聞社　大原篤也　11
▼被災・防災・減災　最前線　秋田県の深刻なクマ被害　秋田魁新報社　喜田良直　12
▼リレーエッセー　大田昌秀さん　元沖縄県知事　沖縄タイムス社　塩入雄一郎　13
▼書いた話書かなかった話　大韓航空機爆破事件「真由美にソウル見せた」　深田実　14▾15
▼マイBOOKマイPR　16
▼記者ゼミ　17
▼写真回廊　20

『レッドシューズ40～ロックの迎賓館の40年～』（門野久志著　ぴあ）



レッドシューズは東京が今よりずっとエネルギッシュだったバブル景気前夜、西麻布に誕生した伝説的なカフェバー。カルチャーの最先端にいるミュージシャンやデザイナーらが集った。

著者の門野さんは福井県おおい町で育ち、高卒後に地元原発に勤めるものの数年で辞め､レッドシューズで働きだす。いったん閉店後2002年、門野さんが２代目オーナーとして南青山に復活させた。著書は店の40周年を記念し昨年出版。シーナ＆ロケッツの鮎川誠・シーナ夫妻、X　JAPANのhide、尾崎豊…。ロックスターたちの知られざるエピソード。素朴な筆致にリスペクトと愛があふれる。

福井新聞社東京支社編集部長兼論説委員　柴田　裕介

『てんやわんや』（獅子文六著　筑摩書房）



作家獅子文六は終戦の年の暮れ、妻の郷里・宇和島市津島町に「戦後疎開」した。戦中に発表した『海軍』での追放を恐れて、ともいわれる。温和な四国西南の風物と人は、隠棲の無聊を大いに慰めた。本作でも都市部の荒廃をよそに、大食いに興じ、野に川に遊ぶ人々のドタバタが繰り広げられる。ただ、それが理想郷を描いた通俗小説に終わらないのは、戦前戦後の日本について自問し続ける視点があるからだろう。獅子が描いた街並みは今年、重要伝統的建造物群保存地区への選定が決まった。この作品が街並み保存の原動力の一つとなったに違いない。

愛媛新聞社編集局生活文化部長　清原　浩之

『憂き夜に花を　花火師・六代目鍵屋弥兵衛』（吉川永青著　中央公論新社）



享保の大飢饉により失業者や餓死者までが出た江戸の町を花火で明るく照らそうとした花火師・六代目鍵屋弥兵衛。物語は弥兵衛が仲間と共に大川（現隅田川）で、現在の隅田川花火大会の基となる大仕掛けを披露するまでの苦悩を描く。

初代鍵屋弥兵衛は大和国大塔村（現奈良県五條市）の出身。奉公に出た新町村（同市）の火薬製造所で高い技術を身につけ江戸へ出る。日本橋横山町で「鍵屋」の看板を掲げ、初の民間花火業者となったという。

いまの暗い世の中を明るく照らす大輪の花火を見上げて、心から「かぎやー」と叫んでみたい。

奈良新聞社東京支社　矢部　創

『おばあさんの山里日記』（文・佐々木章　語り・椎葉クニ子　葦書房）



宮崎県椎葉村で伝統の焼き畑農業を夫の秀行さんとともに守り続けた椎葉クニ子さん＝いずれも故人＝に、山里の暮らしを聞いてまとめた本だ。自然の循環の中に人の営みがあり、「持続可能性」について考えさせられる内容となっている。

本書では、毎年７月末からお盆にかけて山の斜面を焼き、ソバ、ヒエ、アズキ、ダイズを１年ごとに栽培し、その後は約20年間放置して地力を取り戻す―という焼き畑をクニ子さんの言葉で解説。ほかにも山野草の調理法、地名の由来、農耕儀礼など山里の知識がちりばめられている。

宮崎日日新聞社編集局次長　戸高　大輔

『女生徒』（太宰治著　KADOKAWA）



女性の語り口による告白をそろえた短編集。うち『葉桜と魔笛』は、津軽生まれの太宰と島根の関わりを示す一篇だ。舞台は「島根県の日本海に沿った人口二万余りのあるお城下まち」。

老婦人が18歳で亡くなった妹にまつわる不思議な出来事を振り返る。

町名は明らかではないが、県西部の浜田市と思われるのは、太宰の妻美知子さん（1912 ～ 97年）が、父の仕事の関係で、当地で生まれたから。妻から着想を得たのだろう。新婚の1939年発表の同作は、病の妹を励まそうと思案する姉のふるまいと思想が、美しい口調でつづられ、心にしみる。

山陰中央新報社論説委員　岡田　素衣

『太宰治賞2023（受賞作「自分以外全員他人」ほか）』（西村亨著ほか　筑摩書房）



太宰治賞は吉村昭、宮本輝ら多くの作家を輩出している新人小説賞で、第39回は鹿児島県出身の西村亨さんの「自分以外全員他人」が応募1246編の中から選ばれた。

同作はマッサージ店に勤める中年男性が主人公。コロナ下での暮らしや身体感覚の描写が巧みで、自分勝手な周囲に怒り、絶望し、破滅に向かう様が描かれる。著者は『人間失格』を読んで作家を志し46歳でのデビューとなった。同作に強い影響を受けており「令和版人間失格」とも言える。ほか最終候補３編収録。「自分以外…」は12月に単行本も刊行された。

南日本新聞社文化生活部副部長　豊島　浩一

地元紙記者が選ぶ

地域ゆかりの一冊

12月号恒例の「おすすめ本」特集。今年は地域にゆかりのある一冊を、地元紙記者11人に選んでいただきました。

『汐さいの地図』（梅田うめすけ著　ごまめ書房）



日本初の実測による日本地図を作った江戸時代の測量家、伊能忠敬。偉人として紹介されることの多い人物の周辺にも光を当て、等身大に描いている。

著者は「時代の息遣いを伝えたい」との思いから、幼少期の登場人物の話し言葉は千葉県東部のお国なまりで表現した。耳なじみのない人にはとっつきにくいが、忠敬にとっての古里の土や磯の匂いが漂う臨場感がある。

50歳で隠居し江戸に出るまでは代々続く商家の当主として家業や村政に携わった。小さい時から算術が得意で、村役人として手がけた治水工事を通し測量の知識を培った歩みが分かる。

＊伊能忠敬、著者の梅田さんとも、生まれ育ちは現在の千葉県

千葉日報社生活文化担当　伊藤　幸司

『鎖塚　自由民権と囚人労働の記録』

（小池喜孝著　岩波書店）



この本は民衆史家の小池喜孝さんによる労作で、2018年に岩波現代文庫から45年ぶりに復刊された。

鎖塚は網走・旭川間の道路工事中に死んだ囚人たちを鎖がついたまま葬った塚。明治の北海道開拓のために過酷な労働を強いられた囚人労働の実態を掘り起こし、近代日本の暗部を暴いた。

囚人労働はその後タコ（半奴隷的な労働者）、朝鮮人強制連行へと続く。歴史家の色川大吉さんは1970年代に囚人らの遺骨発掘に参加。「自らの良心を掘り返す営みであり、民衆史という新たな分野を切り開くきっかけになった」との言葉が忘れられない。

北海道新聞社文化部長　伴野　昭人

『ゼロ、ハチ、ゼロ、ナナ。』

（辻村深月著　講談社）



山梨県笛吹市出身の直木賞作家辻村深月さんが、山梨を舞台に描いた一作。本人にとって初めて直木賞候補になった作品で「自分が山梨でＯＬをしていた頃までに見てきたものを全部書こう、という思いからはじまった小説」と自身の解説本に書いている。

山梨県人は、甲府市などの地名や街の雰囲気、富士山を望む描写に親近感を覚えるが、今作では何よりも、地方に暮らすアラサー女性が結婚や恋愛を巡って抱える生きづらさが読者の共感を呼んだ。

「地方と都会」というテーマは、辻村さんが作家デビュー 15年で発表した『傲慢と善良』にも通じる。

山梨日日新聞社編集局文化部　清水　健

『邂逅の森』（熊谷達也著　文藝春秋）



東北の豊かなブナの森に奥深く分け入り、ツキノワグマに挑む秋田の阿仁マタギ、松橋富治を通して人間の内なる野生を描き出す。獲物は山の神からの贈り物として、頭領から新人まで等しく分ける「マタギ勘定」など、成果主義と真逆の平等思想が興味深い。

ラスト、富治と山のヌシとの凄絶な死闘は圧巻の一語。読後すぐ、ヘミングウェイの『老人と海』を思い出した。「人間が運命と対峙する海の叙事詩」と評された名作に倣えば、「山の叙事詩」とも呼べる一冊である。『相剋の森』も併せて読めば、人間と自然の在り方についてさらに深く学べると思う。

＊著者の熊谷さんは宮城県仙台市出身

河北新報社論説委員　山﨑　敦

『幸村を討て』（今村翔吾著　中央公論新社）



タイトル名は登場人物たちが場面場面で吐くせりふで、物語最大のキーワードだ。しかし、信州人にじんとくるのはこちらのせりふに違いない。「信濃の侍は、雪を割って咲く華こそ美しいと知っておりますれば」。真田を隙あらば潰そうと目論み、田舎侍と蔑む徳川家康に対し、昌幸が物語序盤に、嫡男の信之が最終盤にこう言い放つ。圧倒的に強い権力者に立ち向かい、理を貫いて見事に散り、あるいは生き残っていくしたたかさを持つ真田の面々。戦国時代を辛抱強く耐え抜き太平の世を開いた家康に向けられた反骨の言葉だけに、一層痛快に響く。

信濃毎日新聞社文化部長　中村　直志

日本赤十字社職員による ガザ報告会見

11月17日

ガザの現状「ミゼラブル」

ガザにあるアルクッズ病院で7月から日本赤十字社の医療支援事業で働いていた看護師の川瀬佐知子さん（右）が、11月5日に帰国した。高い塀に囲まれたガザ独特の事情もあり、イスラエル軍の砲撃にさらされる現状を知る術は限定されている。それだけに川瀬さんが語る体験は生々しく、極めて悲劇的だ。

川瀬さんがまず紹介したのは10月7日のイスラエル・ハマスの衝突以前のガザの様子だった。多くの人が行き交い、物も潤沢にあり、何より人々が明るく優しい。そんな光景を語る川瀬さんの声は弾んでいて、かえって今のガザがいかに非情な状況にあるのかを浮き彫りにする。逃げ場のない人たちのところへ砲撃が行なわれ、大勢の女性や子どもが亡くなり、救急車も攻撃を受ける。病院近くにも着弾し、救急外来で対応していた医師が運び込まれた患者を見たら自分の子どもたちで、一人はすでに亡くなっていたという。



川瀬さんは、エジプトに退避する際に電話したアルクッズ病院の同僚の言葉を読み上げた。「自分たちがどんな悪いことをしたの？　命の重さはみんな同じはずなのに、この世界はフェアにはできていない。世界中が自分たちを攻撃している。自分たちに人権なんてない。私たちは本当にミゼラブル（惨めで不幸）だ」。それまで努めて冷静さを保っていた川瀬さんの感情が、この時決壊した。

どう考えても異常で、あってはならないことが起こっている。川瀬さんの言葉から、それを何としてでも止めたいという強い思いが迫ってくる。会見に同席した佐藤展章さん（左）は、国際赤十字の取り組みを通じて世論喚起と人道支援尊重機運の醸成を図りたいと話した。

メディアは世論に訴える手段を持っており、我々にしかできないことがあるはずだ。人の命を救うことを諦めてはいけない。

毎日放送東京報道部次長　石田　敦子

今月のゲストの皆さん

ゲスト全員の会見リポートは右のQRコードを開きウェブサイトで読めます。出席欄の「会」は会場、「オ」はオンラインの参加人数です。

大野 英男（おおの ひでお）さん 東北大学総長



東北大学は、世界トップクラスの研究力を目指していると国が認定し、助成する「国際卓越研究大学」候補第１号に選ばれた。「研究者が研究にかけられる時間をつくるだけで大変な資金が必要になる。いただける資金をあてて地球規模の課題解決、価値創造に貢献したい」

■11・28／出席：会27人、オ55人／「大学どこへ」①／司会：倉澤治雄委員

Eloi Fillion（エロワ フィリョン）さん 赤十字国際委員会（ICRC）アフガニスタン代表部首席代表



タリバン復権後、外国の資金援助が制限されている。「2021年から22年にかけICRCは必要に応じアフガニスタンの活動を３倍以上にした。政治的膠着などのため人道支援は減り、今年は活動を３分の１に縮小。来年さらに縮減され、病院支援などに大きな影響が出る」

■11・28／出席：会16人、オ15人／司会：大内佐紀委員／通訳：池田薫さん

東澤 靖（ひがしざわ やすし）さん 明治学院大学教授



国際人権法が専門。「ハマスによる民間人の殺害やイスラエルによる病院施設の攻撃など、双方に戦争犯罪の可能性がある」「法の支配を掲げながらイスラエルを支持する西側諸国にグローバルサウスは懐疑的だ」「法は守らなくていいとのイメージを世界に与える」

■11・29／出席：会34人、オ78人／「ハマス・イスラエル衝突」②／司会：大内佐紀委員

＊下記のゲストの会見リポートは６～８ページに掲載しています

日本赤十字社職員によるガザ報告

川瀬 佐知子（かわせ さちこ）さん 大阪赤十字病院看護部 集中治療室看護係長

佐藤 展章（さとう のぶあき）さん 日本赤十字社事業局国際部次長

■11・17／出席：会39人、オ56人／司会：江木慎吾専務理事

国分 良成（こくぶん りょうせい）さん 慶應義塾大学名誉教授

■11・21／出席：会53人、オ87人／「中国で何が起きているのか」①／司会：高橋哲史委員

Kent Calder（ケント カルダー）さん ジョンズ・ホプキンス大学教授

■11・22／出席：会28人、オ71人／「中国で何が起きているのか」②／司会：杉田弘毅委員／通訳：池田薫さん

榊原 英資（さかきばら えいすけ）さん 元財務官、インド経済研究所理事長

■11・22／出席：会26人、オ45人／「変動相場制50年～円の攻防」／司会：播摩卓士委員

「中国で何が起きているのか」①
国分　良成
慶應義塾大学名誉教授
11月21日

「根拠ある推察」重ねるしか



中国がおかしい。

安定しているかにみえた習近平政権で外相、国防相が突然、解任された。経済は不動産不況を起点にかつてないほどの苦境にある。日本と同じように「失われた30年」の道を歩むのではないか。そんな懸念すら出始めた。

いまの中国をどうみればいいのだろう。それを考えるヒントがほしくて「中国で何が起きているのか」と題する記者会見のシリーズを企画した。1回目のゲストに迎えたのが、中国政治を専門とする慶應義塾大学名誉教授の国分良成さんだ。

2021年まで9年にわたって防衛大学校の学校長も務めた国分さんは、中国政治の研究を始めて今年でちょうど50年になる。その経験から語ったのは、中国という「わからない」存在をわかろうとする研究者としての覚悟だと思う。

国分さんが冒頭で紹介したのは米国で活躍した中国研究の大家、ドーク・バーネットが1970年代に残した言葉だった。「中国研究ですべての予測は暫定的であり、事態が現実に展開するにつれて修正されるものとみなされなければならない」

言わんとしたのは中国で何が起きているのか、本当のところはわからない以上、「根拠のある推察」を重ねて判断するしかない、という中国研究の難しさだ。

根拠のある推察に必要なのは「複数の客観的な証拠」「経験値・歴史的類推」「常識」の3つだという。中国では共産党の内実を記録した文献や、当事者の証言はまず表に出ない。習近平政権になり、その傾向はますます強まっている。

私たちが理解したつもりになっている中国は、どこまでいっても「推察」にすぎないのだ。中国を語る際にはそんな謙虚さと、責任の重さを忘れてはならない。国分さんはそう訴えたかったのだろう。私たちジャーナリストも、肝に銘じるべきだと感じた。

シリーズ担当企画委員　日本経済新聞社編集委員兼論説委員　高橋　哲史

「中国で何が起きているのか」②
ケント・カルダー
ジョンズ・ホプキンス大学教授
11月22日

「ペロシ氏訪問」前の状態に



対立が続く米中両国は、2022年8月のペロシ下院議長（当時）による台湾訪問をきっかけとして険悪な状態が続いていた。緊張緩和が期待された23年11月の米中首脳会談の1週間後、東アジア情勢に通じた、米ジョンズ・ホプキンス大のケント・カルダー教授の記者会見が開かれた。

カルダー教授は今回の首脳会談で、軍同士の対話再開や、米国で社会問題化している合成麻薬「フェンタニル」対策の協力で合意したことを指摘し、「少なくとも当面はペロシ氏の訪問前の状態に戻った。来年の間は（対立は）中断するのではないか」と語った。特に、バイデン米大統領の再選が懸かる選挙が来年に迫るタイミングで首脳会談が行われ、中国の習近平国家主席が米高官や財界人と幅広く意見交換したことを挙げ、「関係安定に大きなプラス」と評価した。

カルダー教授によると、バイデン政権は、1914年に始まった第一次世界大戦のように関係国の相互理解が不足しているために戦争が起きることを恐れている。今回の首脳会談に先立ち、ブリンケン国務長官らを中国に派遣したのは、誤解によって衝突が起きることを危惧していたからだという。

ただ、今回の会談で対立が解消したわけではない。カルダー教授は「長期的に両国関係の管理は構造的に困難だ」と分析した。米議会、特に共和党は台湾との連携を重視し、現在の米中関係を第二次大戦直前の日米関係と似たものと捉えていると説明。バイデン政権と議会は異なるスタンスを取っているが、「中国側はこの違いを理解しているのだろうか」と語り、習政権がバイデン政権の真意を見誤ることへの不安に言及した。

一方、2024年1月の台湾総統選については「米政権が望むのは安定だ」と強調。その上で、与党・民進党の総統候補、頼清徳氏が副総統候補に選んだ蕭美琴・前駐米代表（大使に相当）は米政界に精通しており、民進党政権が継続するなら「米議会は好感する」と予想した。

時事通信社外信部デスク　北條　稔

「変動相場制50年～円の攻防」

榊原　英資

元財務官、インド経済研究所理事長

11月22日

「強い円は日本の国益」



かつて大蔵官僚として為替介入を指揮し「ミスター円」の異名を取った榊原英資氏が、変動相場制移行から50年の節目に日本経済の歩みと重ね合わせ、為替相場の現状認識を交えて語った。一時急速な円安が進んだドル円相場の先行きには円高予想を示した上で「円高の方が日本にはプラスという状況に変わってきた。強い円は日本の国益」と強調した。

１９７３年にドルの切り下げにより固定相場制が崩壊し、変動相場制が始まった意義について、輸出中心から海外進出の加速へ「日本企業のグローバル化に非常にプラスになった」と解説。以後、円高傾向に転換し、市場介入を含めた時々の為替政策など曲折を経て現在に至る推移を説明した。最近では昨年10月に約32年ぶりの円安水準となる１ドル＝１５１円94銭を付け、今年秋も１５１円台を記録したが、円安相場は「底を打ったと思う」と言う。

時代とともに為替のインパクトは大きく変わったと力説する。「輸出を促進するから円安がいいんだというところから、グローバリゼーションに対応して日本企業が海外に積極的に出た結果として円高の方がプラスになった」と話した。

最近の円安は日本売りによるものではなく、緩和を続けた日本と引き締め局面だった米国の金融政策の差が原因と分析。今後は米経済が弱含む一方、日本経済は力強さが期待できることを円高見通しの根拠に挙げ「来年の夏から年末にかけて恐らく１ドル＝１３０円ぐらい、場合によると１３０円を切る」と予測した。

円高デフレ再燃の懸念には「デフレの時代はもはや終わった。２、３％の物価上昇が日常的になり緩やかなインフレというか経済成長の時代に入った」との見方を示した。

「為替介入が好きな方だった」と自身の舞台裏も披露。ミスター円が円高を歓迎する姿からは日本の将来に対する明るい展望が感じ取れた。

共同通信社経済部次長　平田　弓月

試写室（11.8）

ヤジと民主主義 劇場拡大版



排除 許しているのは誰か

「アベやめろ」。札幌市で２０１９年参院選遊説中の安倍晋三元首相に叫んだ男性が、警察官に力ずくで聴衆からつまみ出された。「増税反対」と声を上げた女性も追い出された。日本は公道で演説する政治家に異論をぶつける自由もないのか。

いわゆる「ヤジ排除問題」の真相と波紋を、北海道放送（ＨＢＣ）報道部取材班は４年間追い続けた。ニュースや特集番組で放映した映像の他に、知られざる排除事例を発掘し、劇場拡大版のドキュメンタリー映画にまとめた。生身の政治参加の意義と弾圧の歴史も考察する。

ニュースでは知り得なかった現場の様子、政治に意見を届けたい人々のやむにやまれぬ動機や心情が丁寧にすくい取られる。個々の意思が素朴なだけに、不釣り合いに過剰な警備は、異常さを超えて、もはや滑稽に見える。北海道警が裁判用に、現場の再現映像を撮影するシーンなど思わず失笑が漏れていた。罪のないプラカードまで制止する様は、中国公安のデモ統制にそっくりだ。

二人が排除される様子は、一般の聴衆も撮影していた。取材班はそうした映像を丹念に探し、何が、どう行われたのかを多角的に構成してみせる。初めは周囲の無関心さに気をもむが、沈黙する市民は単なる傍観者ではなかったと気づかせてくれるのも、この映画の功績だろう。

試写会後の対談で、公安担当記者経験もあるジャーナリストの青木理さんは「警察権力が深々と突き刺さった安倍政権の末端で起きた病理の一例だ」と指摘。ＨＢＣ報道部デスクの山崎裕侍監督は「私たちが排除を許しているのではないか。ストやデモやヤジを迷惑と思う人たちにこそ見てほしい」と語った。全国の公安警察官たちもぜひ見てほしい。

毎日新聞社専門編集委員　伊藤　智永

上映後の山崎監督と青木さんの対談の様子はこちらから（https://youtu.be/dLddkiTcZE?si=9WYG-XZI2H0YSL4）

ポレポレ東中野ほか全国順次公開
製作：ＨＢＣ北海道放送　配給：ＫＡＤＯＫＡＷＡ

イスラエル・ハマス衝突

遠いガザ もがきながら
怯えも絶望も憎悪も欠片

烝場　聖治（TBSテレビ報道局外信部長）

「これはヤバい」。10月7日、日勤デスク中、見たことのない映像がSNSで出回り始めた。ガザから戦闘員が出てきてイスラエルのキブツを襲っている。イスラエルの民間人がバイクやカートに乗せられ、ガザに運ばれている。兵士の遺体がガザで引きずり回されている。蛮行自体もヤバいが、これにイスラエルがどう反応するのか想像がつかなかった。

これまでのガザ紛争はある程度想像がついたのだ。2012年、14年の紛争は現地で取材したが、前者は空爆のみ。後者は地上侵攻もあったが、目標はイスラエル側に戦闘員がひょいと出てくるためのトンネル網であってガザ全体を潰すような予感はなく、共にエジプトが仲介して停戦した。ただ今回はそれでは済まない。空前規模の地上戦は必至。犠牲者の数は考えたくもない。嫌な予感、いや、確信だ。

中東支局長がちょうど交代時期で岡村佐枝子・ロンドン支局長にモーニングコール。なる早でイスラエルに入るよう依頼しつつ、前中東支局長で現NEWS23の須賀川拓記者にも架電し「ヤバいよヤバいよ」と連呼ライク出川哲郎。

両側取材できぬ葛藤

2記者2カメが9日に現地入り。ガザで空爆が始まれば、まずはスデロット（イスラエル南部）あたりの丘に上がって遠景を撮影するのがスタンダードだが、今回は外に残存戦闘員がいる可能性があり、実際襲撃されたキブツのメディアツアーでは眼前で軽い銃撃戦が起きた。アンブッシュ（待ち伏せ）が最大のリスク。取材エリア選定は地元フィクサーと慎重に行う。ハマスからのロケット弾もガザに近づくほど退避の時間が短くなるのでクルーはヘルメットと防弾ベスト着用でシェルターにダッシュできる位置から中継をしつつ、逃げられる時には逃げる。伏せるしかない時には伏せる。



襲撃された警察署の前で（10月10日/イスラエル・スデロット/TBSテレビ提供）

須賀川、合流した増尾聡・新中東支局長、渡辺琢也・戸恒幾汰の両カメラマンらはウクライナ取材の経験あり。東京サイドで見ている身にとってアシュケロン、アシュドッド（いずれもイスラエル中部）、懐かしい地名は光景が見える安心さはあるが今回の「ネクストレベル感」も常に意識して慢心せぬよう心がける。

クルーはガザに近づき、キブツの惨状を記録し、遺族や人質家族の慟哭を聞く。が、すぐにここの紛争ではお馴染みの「ガザの方が被害が大きいのにイスラエル側ばかり取材している我々」という焦燥にとらわれる。過去のガザ紛争はそれでも比較的短期間に両側を取材できる稀な紛争でもあった。Break on Through To The Other Side、エレツ検問所はパラレルワールドへの入り口。しかし今回は簡単にはガザ入りできない。海外メディアやNHKは中にいる現地スタッフを使って独自の映像を届けている。うらやましい。ただ彼らの安全確保には相当神経を使うだろうと想像する。弊社は中の住民、中に家族がいる人、人道支援関係者、UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）の人、などを通じて何とかガザの声を拾おうともがく。

国境なき医師団の白根麻衣子さんには脱出前からインタビューで、帰国後はスタジオで、現地の悲惨を伝えてもらった。西岸にも積極的に出かけて被抑圧の構図とセンチメントを描こうとした。が、それでもガザ内の窮状も怯えも絶望も憎悪も欠片しか伝えられない。

従軍取材は米英ばかり

軍のエンベッド取材が始まったのを見て応募するも呼ばれるのは米英のメディアばかり。日本メディア、ひいては日本にアピールする意味が薄いと見られているのだ。珍しいことではない。外交的影響力も日本語の伝播力も小さい。

まだガザは遠い。プロパガンダの雨もあって、まだちゃんと見えてこない。（イマココ）。

あきば・きよはる▼1995年入社　社会部　各種報道番組の後　2009年より外信部　2度のロンドン勤務を経て現職

性別変更手術要件 違憲

当事者「時代は変わった」
外観要件の行方が焦点

帯向　琢磨（共同通信社社会部）

タイの玄関口・スワンナプーム国際空港から車で約40分。バンコク郊外にある8階建ての建物に入ると、すぐに心電図検査や身体測定、看護師らの問診が始まった。翌日、医師による事前診断で術式を決め、車いすに乗せられて手術室に入り、約5時間後、ストレッチャーに乗せられて病室に戻る―。最高裁が決定を出す約2週間前、性同一性障害の女性が性別適合手術をするためにタイを訪れた時の光景だ。

「あまりに残虐すぎないか」

2004年に施行された性同一性障害特例法は、2人以上の医師から診断を受けた上で①18歳以上②婚姻していない③未成年の子がいない④生殖機能がない⑤変更後の性別の性器部分に似た外観がある、という要件を全て満たせば、家裁の審判を経て性別の変更が認められるとしている。最高裁によると、22年までに計1万人以上の変更が認められた。

手術のアテンド会社で代表を務める井上健斗さん（38）もその1人。10年以上前にタイで手術を受けて女性から男性に性別を変えたが、手術に対する抵抗は全くなかったという。本当の自分に戻り、パートナーと結婚するためのプロセスとして当たり前に通る道だと捉え、むしろ「これでようやくスタートラインに立てる」と喜んですらいた。

だが数年前に会った時、井上さんの考えは変わっていた。「一生子どもを産めない体にしなければならないなんて、あまりに残虐すぎませんか」。既に海外では人権侵害だとして手術要件の撤廃が潮流となり、2014年には世界保健機関（WHO）などが「不本意な断種の廃絶を求める」と指摘していた。それだけではない。100万円単位でかかる手術費用は経済的な負担が大きく、健康上の理由で手術が受けられない人もいる。過去に、術後の後遺症に苦しむ人の記事を書いたことも思い出した。



最高裁決定を受けた記者会見で、「違憲」などと書かれた紙を持つ代理人の南和行弁護士（左）と吉田昌史弁護士（10月25日/共同通信社提供）

「恩恵」受けられない人も

果たして10月25日の最高裁大法廷の決定は、「意思に反して身体への侵襲を受けない自由」への制約は重大だとして、④の生殖能力要件を憲法違反だとし、⑤の外観要件は判断せず高裁に差し戻した。申立人自身の性別変更が認められず、代理人の南和行弁護士は記者会見で「不自由や不利益、社会生活の不安は解決せず、苦しい状態は続いてしまう」と話したが、「時代は変わった」と興奮する井上さんの言葉には実感がこもっていた。今回の司法判断が画期的だったことに異論はないだろう。

ただ、「社会が混乱する」「司法の暴走だ」などと保守層からの反発は大きい。今回は外観要件まで違憲としたわけではないため、「男性器の付いた人が女性用の銭湯やトイレを利用する」との懸念とは直結しないし、そもそも当事者の人権とは切り離して考えるべきだ。今後の法改正の場では冷静な議論が求められる。

もう一つ課題がある。手術の是非は今もなお、当事者の間でも意見が分かれる問題だ。「区切りを付けるために必要だ」「性器があること自体が苦痛」。こう話す当事者にとって、手術を経ないことは「邪道」に映る。また実務上、女性は男性ホルモンの投与で外観要件をクリアできるとされるが、逆の場合は難しい。外観要件が残る限り「恩恵」を受けられない当事者がいるのも事実だ。

今回の判断は、LGBT理解増進法の成立や、性同一性障害の人の職場トイレ制限を巡る最高裁の違法判決の流れの中にある。多様性への理解や少数者への尊重は着実に進んでいるように見えるのに、その先にあるのが分断では悲しい。どうすれば当事者に寄り添い、多くの人が納得できる制度設計になるのか。今後の議論を注視したい。

おびなた・たくま▼2008年入社　岡山支局　大阪社会部を経て　15年6月から現職

新・列島報告77　兵庫県
阪神タイガース38年ぶり日本一

「なんば線」対決 総力取材
経済効果は1400億円超

大原　篤也
（神戸新聞社報道部次長）

プロ野球阪神タイガースが1985年以来、38年ぶりの日本一を達成した。18年ぶりにセ・リーグ制覇を飾ると、広島カープとのクライマックスシリーズ（CS）ファイナルは3連勝で突破。59年ぶりの「関西対決」となったオリックス・バファローズとの日本シリーズも4勝3敗で制し、虎党の長年の夢であった「アレ」も「ソレ」もかなった歴史的なシーズンだった。

15年ぶりに再登板した岡田彰布（あきのぶ）監督が口にしてきた「アレ」。シーズン終盤に大逆転で巨人にリーグ優勝をさらわれ、自身の退任にもつながった2008年の悪夢はファンにとってもトラウマになっていた。今年と同じく18年ぶりのリーグ優勝を遂げた03年は7月に優勝へのマジックナンバーが点灯し、破壊力満点の虎フィーバーが起こったが、序盤から好調な滑り出しを見せた今季、虎党は半信半疑のまま、大騒ぎせずに見守っていたようだった。

■慎重一転はじけたワッペン

「あるかも」「ひょっとしたら」と慎重に紙面展開案を練ってきた神戸新聞も「もう、間違いない」と判断した9月から本格的に関連記事のワッペン展開を開始。9月は11連勝であっという間に14日の甲子園・巨人戦で「アレ」が決まった。CSファイナルも難なく勝ち上がり、第7戦までもつれる死闘となったオリックスとの日本シリーズは関係部署の記者を総動員して取材に当たった。


38年ぶりの日本一を達成し、胴上げされる阪神タイガースの岡田彰布監督（11月5日／デイリースポーツ社提供）

今季の阪神は兵庫県出身の選手が主力にずらりと並んだのが特徴だ。

プロ初勝利を含む10勝を挙げ、最優秀防御率のタイトルを獲得した村上頌樹（しょうき）投手（南あわじ市）と、リーグ最多盗塁と日本シリーズ最高殊勲選手（MVP）に輝いた近本光司外野手（淡路市）の淡路島コンビが投打をけん引。さらに、本塁打と打点でチーム2冠の佐藤輝明内野手（西宮市）、扇の要でゴールデングラブ賞を手にした坂本誠志郎捕手（養父市）、先発ローテの一角を担った才木浩人投手（神戸市）と、計5人が快進撃の中心にいた。

甲子園球場（西宮市）は甲子園、京セラドーム大阪（大阪市）はドーム前と、最寄り駅はいずれも阪神電鉄沿線で「なんば線シリーズ」とも呼ばれた日本シリーズ。京セラでの第6戦、第7戦開催時は甲子園でパブリックビューイング（PV）も開かれた。2カ所の球場取材に加え、選手ゆかりの地や飲食店、雑踏警戒などに記者を総動員すると、現場がすぐそこにある「ご近所対決」がいかに大変かを痛感させられた。関西大の宮本勝浩名誉教授の試算によると、「関西対決」の実現による経済効果は日本全体で計約1449億円に上るという。

■がんばろうKOBEの記憶

阪神の本拠地、甲子園球場があるのは兵庫県西宮市。対するオリックスも阪急時代から西宮市、神戸市に本拠地を置き、阪神・淡路大震災のあった1995年のリーグ優勝、翌96年の日本一は「がんばろうKOBE」の合言葉とともに被災地を勇気づけてくれた。拠点が大阪に移った後も、ほっともっとフィールド神戸（神戸市）で年間数試合が組まれ、今でもオリックスを応援する兵庫のファンは少なくない。両球団の日本シリーズ進出決定前後からはオリックスのネタも積極的に出稿した。

1935年に「大阪野球倶楽部」として設立されて以来、阪神の日本一は2度目。11月23日には神戸と大阪で関西2球団による異例の同日Vパレードが設定された。希少価値の高い快挙だが、携わった記者の経験を生かせる次の機会はいつになるのか―との疑問も残っている。

おおはら・あつや▼1993年入社　運動部　阪神総局　社会部（現報道部）　淡路総局編集主任などを経て　2022年3月から現職

被災 防災 減災

最前線㉗

秋田県の深刻なクマ被害

怖さ リアルに伝える

危機感 読者のわが事に

喜田　良直
（秋田魁新報社デジタル編集部部長代理）

朝、自宅玄関のドアを開けた時にクマがいたらどうしよう―。秋田市の市街地で暮らす自分がそんな不安を抱く日が来るとは思わなかった。秋田県はこの秋、異常事態に見舞われている。人の生活圏へのクマの出没が後を絶たないのだ。

今年4月以降の被害者は69人（11月14日現在）で、10月はひと月だけで34人に上った。県に記録が残る1979年度以降、人身被害は2017年度の20人が最多というから、今年の異常さが際立つ。

学校、商業施設、住宅街、交通量の多い幹線道路…。クマはどこにでも現れる。秋田県警に寄せられた目撃件数は10月末で3003件。過去最多だった17年の2・3倍の多さだ。人身被害は11月に入っても続いている。



被害男性の記事を伝える電子版のアイキャッチ画像
（秋田魁新報社提供）

■ウェブにクマ関連ページ

本紙は社会面の一角に「クマの目撃」と題したコーナーを設け、地域ごとの出没情報を毎日掲載している。ウェブサイトでは人身被害を速報するほか、見やすいようクマ関連記事を1カ所にまとめたページも用意した。

ただ、あまりに連日のようにクマ被害が報じられるため、県民の間にも「またクマか…」という慣れのようなものが生じ始めていた。

そんな中、衝撃的な事件が起きた。10月19日、北秋田市鷹巣地域で5人の男女が相次いでクマに襲われた。このうち女子高生を含む3人が被害に遭ったのは、市役所にほど近い街のど真ん中だった。

驚きとともに、危険はもうすぐそこまで迫っていることを実感した。読者にわが事として危機感を持ってもらうにはどうすればいいか。クマに襲われた人間のリアルな声を伝えるべく、10月に北秋田市で被害に遭った男性（66）に連絡を取った。

■外傷の多くは頭と顔に

「あー俺はもう、このまんま死ぬんだなって覚悟したよ」。入院先からオンライン取材に応じてくれた男性は、恐怖の体験を詳細に語った。

男性は自宅の車庫でクマと遭遇。全速力で逃げたが、すぐに追いつかれて倒された。クマは執拗（しつよう）に頭と顔を攻撃してきた。必死に顔を地面に伏せ、右腕で防御。攻撃が止まった一瞬の隙に立ち上がって近くの建物に逃げ込み、一命を取り留めた。

傷は体中に及んだ。右側の頭皮が10センチ四方にめくれ上がり、頭蓋骨が見えた。防御していた右腕は2カ所かまれ、脇腹や太もも、背中も傷だらけ。左の目頭の辺りも切れていた。ドクターヘリで総合病院へ搬送された後、全身麻酔を伴う治療を受けた。

退院後、男性宅を訪ね、当時の状況を解説しながら再現してもらった。その様子は動画に収め、記事と共に電子版で紹介。さらに、医師にも取材し、クマによる外傷は、その多くが頭と顔に集中している実態などを伝えた。

「報道だけ見ていると、クマに襲われる怖さが伝わってこない。俺がこうして顔も名前もけがの状況も全て見せることで、多くの人に『やっぱりクマって恐ろしいな、気を付けなきゃな』って思ってほしい」。被害に遭った男性の言葉だ。

人身被害を伝える際、記事では「命に別条はない」「意識はある状態」などと表現するが、これだけでは具体的なけがの程度までは伝わらない。クマに襲われると人間はどんなダメージを受けるのか。記事も写真も動画も生々しく、痛々しいが、時にそのリアルを伝えることも、これほどクマ被害が深刻な年には大きな意味を持つと考えている。

きだ・よしなお▼2001年入社　デジタル編集部　政経部　本荘支局長　社会部デスクなどを経て　23年4月から現職

私が会ったあの人

大田昌秀さん 元沖縄県知事
「沖縄は日本か」問い続け

塩入 雄一郎（沖縄タイムス社）

元沖縄県知事の大田昌秀さんに初めてお会いしたのは、西日本新聞の記者だった8年前の2015年12月。沖縄県名護市辺野古の新基地建設に伴う埋め立て承認取り消し処分を違法として、国が翁長雄志知事を相手に起こした代執行訴訟の第1回口頭弁論を取材した時だった。

基地を巡って国が県を訴えた訴訟としては、1995年の代理署名訴訟がある。代理署名は基地を米軍に提供するため、強制的に継続使用するにあたり必要な県知事の手続き。大田さんは、沖縄が抱える過重な基地負担などを理由に



（沖縄タイムス社提供）

拒否を表明し、村山富市首相が代理署名の勧告に続き命令を出したが拒否。これを受けて、国側が提訴した。

大田さんは翁長知事に対して何を思うのか。2度も提訴した国のやり方をどう見ているのか。どうしても本人の口から聞きたくなり、出張を1日前倒しして大田さんがいる沖縄国際平和研究所を訪ねた。

■「構造的差別 続いている」

お会いした大田さんは、早口で息継ぎをしないようにしゃべり、語る。90歳とは思えない。インタビューは3時間近くに及んだ。「沖縄は日本だと思うかね」と何度も問われ、返答に窮したのを覚えている。

インタビューで記事にした言葉は、佐賀空港での米軍オスプレイの訓練移転が佐賀県側の反対で撤回されたのに、辺野古の計画が撤回されないことに「沖縄だけ主従関係が続き、構造的な差別が続いている」と悔しさをにじませた部分だった。

大田さんは自身の裁判でも、68年の九州大学への米軍ファントム機墜落事故をきっかけに大半が返還された米軍板付基地に触れて、沖縄との二重基準の批判をしている。

私のインタビューでもファントム機の事故の事について話をしていた。ただ、私はその部分は紙面に載せなかった。事故を巡る大学紛争に参加した元学生たちを取材していたこともあり「板付の基地返還はあくまで闘ったことの成果だ」と考えが違ったからだ。運動に、ケチを付けられたような気がしたというのもある。

■「捨て石」なぜ 究明使命に

だが、当時の私はとても浅はかだったと今は思う。転職して沖縄に住んでみて、あの時の大田さんと同じ思いを強くしているからだ。

飲酒運転に空き巣など米兵が起こす事件は毎週のように起こっている。米軍機のオスプレイの騒音は午後10時を過ぎても聞こえてくる。市民による反対集会は毎日のように県内のあちらこちらで開かれている。国は沖縄だから無視するのか。「沖縄差別」という言葉が頭に浮かぶ。

10月30日は、辺野古の新基地建設を巡る改良工事で、国が玉城デニー知事に代わって設計変更を承認する代執行訴訟の第1回口頭弁論があった。デニー知事は沖縄が抱える理不尽な歴史や現状を訴えたが、裁判官が質問することはなく、37分間で弁論は終結した。大田さんはインタビューで「日本は三権分立が確立されていない」と批判したが状況は変わっていない。

「沖縄は日本か」との問いかけは、大田さんが自身に問い続けた言葉でもあったように思う。インタビューでは沖縄戦で学徒動員され、「捨て石」にされた状況をたくさん見てきたとも聞いた。なぜそうなったかを究明するのを使命だと学者の道を選んだそうだ。

大田さんはインタビューの2年後、92歳で亡くなった。大田さんの言葉を聞いた私は「沖縄は日本か」を自問し、沖縄メディアとしてどう報じていくべきかを考えている。

（しおいり・ゆういちろう　2000年西日本新聞社入社　佐世保支局　社会部　東京報道部などを経て　23年沖縄タイムス社へ　現在　社会部記者）

次号は川名壮志さん（毎日新聞社）にバトンが渡ります。

大韓航空機爆破事件
検察官は電話をとった
「真由美にソウル見せた」



深田　実（ふかだ　みのる）
1950年生まれ　75年中日新聞社（東京新聞）入社　名古屋本社整理部　東京本社・社会部外報部（カイロ支局）などを経て　論説室で一面コラム「筆洗」担当　論説主幹　取締役論説担当を務め　2023年6月退社

だいぶ古い本になるが、アメリカの記者デービッド・ハルバースタムの著書『ベトナムの泥沼から』はこう始まる。〈ツイているか、ツイていないかは、新聞記者の生涯を大いに左右する〉。ピュリツァー賞記者のハルバースタムにはもちろん遠く及ばないが、私がツイていたと今でも心密かに思うことの一つを以下に書いてみよう。

30代半ば、念願の東京社会部配属と同時に私は検察担当となった。その1日目、特捜部の松田昇部長に挨拶に行き、すぐ口論を始めた。私は名古屋の問屋の息子なので「税金は高すぎるし、国の無駄遣いに比べ、脱税はそれほど悪いのか」と口を滑らせた。脱税捜査の指揮官でもある松田さんは文字通り烈火のごとく怒り出し、1時間ほどの議論の末、彼の「脱税は殺人より罪深い」という結語で終わった。そんなふうに、最高検、東京高検、東京地検の幹部たちと世間話をするようになった。プロ野球の話もするし、株の投機話になるとマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を語り出す人もいたが、彼らが私から知りたかったのは、検察の手がける事件を世間はどう受け止めているのか、ということではなかったか。何しろ警察に比べ検察は極めて陣容が小さい。世間の応援なくしては事件はつぶれる。

◆猿ぐつわ、泣き顔で登場

1987（昭和62）年11月、大韓航空機爆破事件が起き、容疑者「蜂谷真由美」がソウルに移送されるので、社会部長から「君、行ってくれ」と命じられた。そう言われても、どう取材すればいいのか。あちこち回るうち、日韓検事交流という海峡を越えた交際のあることを知り、それならば検察幹部たちに韓国の知り合いの検事に紹介状を書いてもらおう、と思いついた。便箋に書いてくれる人もいれば、名刺にさらりと記す人も。6、7通集まった。そして12月15日「真由美」は自殺止めの猿ぐつわをはめられたまま、泣き顔で飛行機のタラップを降りてきた。

◆紹介状頼りに取材開始

早速、紹介状を頼りに取材を始めた。欲しいのは真由美の供述内容である。検察は起訴と公判に備え、取り調べは国家安全企画部（旧KCIA）が行うという。彼女は、おそらくソウル南縁のナムサン（南山）にある安企部本部の奥深くで取り調べを受けている。彼女の存在と供述は、南北朝鮮間の外交に触れる機微であり、政治プロパガンダの格好の材料でもある。聞いた話が本当かどうかまず疑わねばならないし、聞いた話のウラが取れるものでもない。

ある日、紹介状に記された名前の検事が翌年のソウル五輪を準備する事務所の一つに出向していると分かった。訪ねると、その青年検事は背広を着て小型の机に向かっていた。紹介状を見せて挨拶をすませると、本題に入った。

「実は真由美について調べています。彼女はどこでどうしているのですか。何か話しているのでしょうか」

目の前の検事は驚くほど親切だった。

「同期の友人がそちらの方にいる。知っているかもしれない」

彼は机上の電話をとって友人に架け、私たちの前で話し始めた。通訳と私は喜ぶというより、むしろ緊張

していた。受話器を置くと、彼はこう言った。

◆ソウルの発展「知らない」

「真由美をバスに乗せて、夜のソウルの繁華街を回ったそうだ。彼女はソウルの発展をまるで知らない。そう教えられていないし、信じてもいない」

私はスパイである真由美は海外の事情に通じ、従ってソウルの発展を知らないはずはない、と思いつつも記事にした。残念ながら供述内容には届かなかったが、私とナムサン奥深くの取調室との間にか細いが一本の糸がつながった気がして、ツキがきたと思った。事件の内容に直接かかわるものでなく、新聞の扱いも大きくはなかったが、記者としての満足感はあった。韓国紙は一斉に追ってくれた。



1987年12月16日付東京新聞朝刊紙面

先にウラの取れない話と書いたが、この話は後日ウラが取れた。

真由美こと金賢姫（キムヒョンヒ）は本を出した。日本語版は『いま、女として／金賢姫全告白』（文春文庫、上下巻）。ここには生い立ちから、訓練、爆破、取り調べ、死刑判決、そして特別赦免まで全て書いてある。

取り調べの部分を見ると、12月22日の項に男性捜査官から「今日はソウルの見物でもしよう」と告げられ、黒のツーピース、ジャンパー、セーターを与えられたという。車窓から見えた自動車の波、看板の列、人々の身なりに目を見張り、中でも露天商の並べる「北」では見ないような高級時計、服、靴に驚いたという。彼女はこう記す。〈ソウルでのはじめての外出……。それが私にとって決定的な罠になるとは、予想もできないことだった。ただ一度のソウルでの外出が、私の固い意志を根こそぎ揺さぶるようになるとは〉

これを機に全面自供となる。食事の時、コチュジャンを指して「これはケチャップ？」などと嘘を重ねてきたのに、ソウルの繁栄という真実を前に人格の多くを占めていた虚構は崩れ去った。真実の強さであり彼女の理性の勝利である。

検察官に紹介状を書いてもらったというと、それは癒着じゃないか、という人がいるかもしれない。しかし私は反論したい。それで貸し借りができるわけではないし、そういう相手かどうか私なりに判別してきたつもりである。権力に迫らねば監視は難しい。そのころの検察の陣容は、世代を追って言えば、戦後特攻帰りのような検察官が育てた検事がロッキード事件をやり、ロッキード事件をやり抜いた検事が育てた検事たちである。彼らはリクルート事件へ突き進むことになる。古武士のような面々で、質朴篤実、靴下につぎをあてている者もいた。

彼らの家を訪ねると、居間の書棚に『裁かれる首相の犯罪／ロッキード法廷全記録』の幾巻かの銀色の背表紙の並ぶのをよく見た。傍聴記を書いた東京新聞特別報道部編。諸先輩の仕事のおかげでソウルのツキもあったのだと思う。

◆国家の闇、暴けず痛恨

ツキのなかったことも挙げておこう。初任地の富山県高岡支局でサツ回りをしていた時のことである。

1978（昭和53）年夏、日本海に面する海岸で若いアベックが誘拐されそうになった。犬が吠え、男性が民家に救援を求めた。地元紙の一つが社会面トップで「暴走族に襲われたか」と報じた。抜かれた私は捜査一課長を問い詰めた。彼は「未遂だ。書かない方がいい。かわいそうじゃないか」と言い張った。彼とは、全国手配の怪盗を取り逃がした大失態などを書きもしたが、外国人を調べる英語通訳を密かに頼まれる仲でもあった。結局、私は書かず、後年、事件は北朝鮮の犯行と分かる。

遺留の特殊な猿ぐつわは、タラップを降りる金賢姫がはめられたものと似て口の奥深く入る。誤報は免れたものの私には国家の闇を暴けなかった痛恨事である。そのころ拉致は集中発生し、新潟の横田めぐみさんが拉致されたのは前年の初冬である。報道が早ければ、拉致被害は抑制されていたかもしれない。

ハルバースタムはある誤報の回避というツキにより念願のベトナム派遣となった。私は様々のツキを得て、希望のカイロ支局赴任となり、ラビン暗殺に出会い、アラファトと握手することになる。

マイBOOK マイPR

『コスタリカ 「純粋な人生」と言いあう平和・環境・人権の先進国』

伊藤 千尋（朝日新聞出身）

平和輸出国に見る目指す国

日本に次いで世界で二番目に平和憲法を制定し、本当に軍隊を全廃したコスタリカ。周囲の国々の戦争を終わらせて大統領がノーベル平和賞を受賞し、国連核兵器禁止条約を提案した「平和の輸出国」です。

幼稚園から平和を、小学生から民主主義を教育し、小学生が憲法違反に訴える国。義務教育は幼稚園から高校までの13年、エコツアーの発祥地で自然エネルギーほぼ100％を達成し、難民を100万人規模で受け入れた人権の国です。貧しい開発途上国が幸福度世界一に至る過程に、混迷日本へのヒントを見ます。



高文研
1,980円

『ロシア・ウクライナ戦争 近景と遠景』

国末 憲人（朝日新聞社論説委員）

「この戦争」の意味を探る

その規模と影響の度合いから、冷戦後で最大級の出来事となったロシア・ウクライナ戦争を、人々はどう生き抜いているのか。昨年6度にわたり現地を訪ね、市民や兵士、攻撃の被害者、虐殺の遺族らと語り合った。

本書はその記録であり、「近景」として見た現場からの報告に加え、「遠景」からの考察も試みた。世界と歴史にとって、この戦争が意味するものは何か。イラク戦争などでの筆者の取材経験を振り返りつつ、探った。



岩波書店
2,970円

『アメリカはなぜ安倍晋三を賞賛したのか』

古森 義久（産経新聞ワシントン駐在客員特派員）

米国での安倍氏評価の変遷

安倍晋三元首相が日本で暗殺された直後、アメリカの最大海軍基地でも、首都ワシントンの公共施設でも一斉に弔意を表す半旗が掲げられた。アメリカはなぜ当の日本よりも熱い超党派の追悼を表したのか。本書は安倍氏との40年もの交流があり、ワシントンと東京で報道にあたった著者がアメリカでの安倍氏への評価の変遷を追い、究極的には一致した賞賛を得た経緯を詳細に追った希少な「安倍晋三論」である。



産経新聞出版
1,650円

『「正義」のバブルと日本経済』

藤井 彰夫（日本経済新聞社専務執行役員論説委員長）

「正義」のナラティブが危ない

「銀行への公的資金投入はけしからん」「中小企業を救え」「高齢者は助けろ」…。誰もが異論を唱えない「正義」のナラティブ（物語）。これがバブル崩壊後の日本経済の長期停滞の一因になったのではないか。そんな仮説から、いくつかの経済事件を振り返ってみた。メディアも含め「時代の空気」となった「正義」が、日本経済をゆがめてしまった例がいくつもあった。足元でもそれは起きているかもしれない。自省をこめて。



日本経済新聞出版
1,100円

■会議報告

●第448回会報委員会

（11・6 大会議室）

12月号、明年1月号の編集と来年3月号に掲載する「3・11企画」について協議した。

出席 榊原委員長、志賀、水野、大石、佐藤、萩原、勝田、稲澤、倉重、二村の各委員。

●第544回企画委員会

（11・14 9階会見場＆オンライン）

今後のゲスト候補について意見交換した。来年の予想アンケート問題作成の担当分野も決めた。

出席 藤井委員長、秋山、井田、元村、澤田（克）、橋本、猪熊、大内、菅野、辻本、乾、森田、杉田、小林、中村、澤田（信）、山口（哲）、岡山、伊藤、今井、出川、播摩、小栗、平井、野田、倉澤、迫田の各委員。

●第555回会員資格委員会

（11・15 小会議室）

12月1日付入退会を審議、理事会に答申した。

出席 前木委員長、早田、竹川、小貫、今市、菊池、森安、古賀の各委員。

●第703回理事会

（11・15 10階ホール）

2023年度上半期の事業報告と決算について事務局が報告した。

出席 前田理事長、沢井副理事長、江木専務理事、角田、前木、藤井、榊原、藤野、惣田、今井、齋田、吉原、曽山、西、伊佐治、小林、吉次、瀬尾、神田の各理事、山口監事。

IT編⑥ 記者のためのGitHub入門

11・11／講師：荻原和樹 Google News Lab テーチング・フェロー／出席：会場6人、ウェブ19人

■原稿執筆にも有効なツール

ファイルやソースコードを管理・共有するプラットフォーム、GitHub（ギットハブ）の基本的な使い方を学んだ。アップロードしたファイルを修正した際に変更履歴が残るため、削除した箇所も修正履歴として残せる。そのため、ソースコードだけでなく「原稿の執筆・管理にも使える」と紹介した。（事務局）

調査報道⑥ 7年前に報じたビッグモーターの違法性

11・18／講師：市岡豊大 産経新聞社政治部記者／出席：会場7人、ウェブ18人

■「きっかけ」と「粘り強さ」

保険金の不正請求が発覚した中古車販売大手のビッグモーター（BM）。7年前にBMの「違法性」を報道した市岡さんは「失敗談だと思っている」と切り出し、取材を振り返った。

当時は社会部遊軍記者。取材のきっかけは、同僚に寄せられた情報提供だった。自動車保険の契約で、前月の販売実績に応じて目標を下回った店長が上回った店長に現金を支払う―。「罰金」制度を裏付ける内部資料を入手し、就業規則や労基法、弁護士の見解から違法性があるのではないかと考えた。BMは事実関係を認めたが、社との関係性は否定した。

2016年の報道後、反響は大きく次々とタレコミが寄せられた。「本当に会社は関与していなかったのか」「社員を出向させている大手損保会社は認識していなかったのか」。市岡さんはこうした疑問から追加取材を進め、社長の関与を思わせる社内メールの存在、内部資料を大手損害保険の出向社員が作成していたことを続報した。

だが、その後は情報提供者と疎遠となったことや、当時は一民間企業の問題で、社として変わろうとしているとの話も周囲からあり、他の取材にも忙殺されるうちに関心は下がっていったという。他のタレコミも当時は「ピンと来る」情報はなかったが、現在の不正請求問題に触れ「粘り強く取材していたら」と悔恨した。

自身の経験から、調査報道には情報提供から問題の所在に気付く「きっかけ」があることと、取材を続ける「粘り強さ」が大切と強調した。（事務局）

土曜記者ゼミ

支局・通信員から

震災が変えた「モノ」

昨年4月に東京に赴任し、学生時代以来、20年ぶりの都会生活を送っている。福島県の地方紙記者として再び上京したが、かつての自分と比べると古里への向き合い方の違いに気づく。あの頃はとにかく福島から離れたいとの思いが強かったが、今は古里のために何か少しでもできることがあればと切に思う。心境の変化は東日本大震災と東京電力福島第1原発事故があったからに他ならない。

あの日は、当時の勤務地だった福島県浜通りにある南相馬市にいた。緊急地震速報に先んじて襲ってきた激しい揺れに虚をつかれたのが始まりだった。津波の恐ろしさも目の当たりにした。海から1キロ以上離れた場所で、見えるはずの防災林は水平線に姿を変え、今にも迫ってきそうにも思えた。放射線に関する知識が乏しい中、「原発が爆発した」との情報が飛び込んできた際には放射線への恐怖に心臓が早鐘を打った。

あの日を境に、震災と原発事故関連の報道が仕事の中心となった。複合災害で傷ついた古里や県民に直接触れる中で、復興を記事で後押ししようとの思いは自然に芽生えた。あれから12年9カ月。福島県では今も7市町村に帰還困難区域が残る。福島第1原発の廃炉作業は溶融核燃料（デブリ）の取り出しがいまだ始まらないなど課題は山積している。

福島民報は昨年8月1日付で発行した「2032年の福島民報」で、県民と約束を交わした。日付は2032年8月1日。若手社員を中心に創刊130周年記念特集として制作した別刷り22ページで、科学技術の進化によってもたらされる人の暮らしの変化や地域資源を生かしたまちづくりなど10年後の福島を表現した。帰還困難区域全域の避難指示解除など実現しなければならない未来にも触れた。県民とともにつくり上げようとの思いと、困難を乗り越えて力強く歩んでいく希望を込めた。約束の時まで9年もないと思うと、一日も無駄にできない。

福島民報社東京支社報道部編集主任　佐藤　庄太

4年ぶり新年互礼会 1月23日18時から

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、長らく中止してきた新年互礼会員懇親会を4年ぶりに、1月23日(火)午後6時から10階ホールで開催します。当日は「2023年予想アンケート」の結果発表ならびに最高得点者の表彰が行われます。また会場では「2024年予想アンケート」の投票もできます。ふるってご参加ください。

2024年経済見通し研究会

毎年恒例の経済見通し研究会を下記のように行います。会場は初回のみ9階会見場、2回目以降は10階ホールです。

■1月10日(水) 15:00～16:30
白井さゆり 慶應義塾大学教授
「内外経済と日本を含む世界の財政・金融政策の展望」

■1月17日(水) 13:30～15:00
中空麻奈 BNPパリバ証券グローバルマーケット統括本部副会長
「グローバルクレジット市場の現状と見通し」

■1月17日(水) 16:00～17:30
前田栄治 ちばぎん総合研究所社長
「日銀の金融政策の行方と経済・財政運営」

■1月19日(金) 13:30～15:00
酒井才介 みずほリサーチ&テクノロジーズ調査部経済調査チーム主席エコノミスト
「賃金・物価の動向と個人消費」

■2月5日(月) 13:30～15:00
福本智之 大阪経済大学教授
「中国経済の現状と見通し」

日本記者クラブ賞・同特別賞募集始まる

日本記者クラブ賞・同特別賞の募集が始まりました。締め切りは1月31日(水)です。

■日本記者クラブ賞
取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰します。会員または法人会員社に属する現役ジャーナリスト個人を対象に、個別のスクープではなく、最近数年間の業績が顕著であることを重視して選考します。クラブ会員であれば推薦できます。

■日本記者クラブ特別賞
原則として会員以外のジャーナリズム活動を顕彰しますが、会員社の取材班・番組班などチームの業績も対象となります。また外国人や故人も対象です。クラブ会員だけでなく日本新聞協会あるいは日本民間放送連盟加盟の加盟社に属する方であればどなたでも推薦できます。

◇

両賞とも、日本記者クラブのウェブサイトにある応募フォームに必要事項を入力のうえ、参考資料を事務局に提出してください。https://www.jnpc.or.jp/award2024

詳細は事務局の杉本(03-3503-2727)へお問い合わせください。

情報発信

クラブ施設では会員による各種会合が行われています。

■第12回日本医学ジャーナリスト協会賞授賞式・記念シンポジウム
第12回(2023年度)の受賞者への授賞式と記念シンポジウムが開かれた。受賞者は以下の通り。
〈大賞〉ETV特集『ルポ 死亡退院 精神医療・闇の実態』青山浩平さん 持丸彰子さん(NHKディレクター)、『「ゆりかご15年 いのちの場所」と一連の報道』熊本日日新聞社「ゆりかご15年」取材班
〈優秀賞〉『ツベルクリン騒動 明治日本の医と情報』(名古屋大学出版会)月澤美代子さん
(11.13 9階会見場)

■風に立つライオン・オブ・ザ・イヤー贈賞式
シンガー・ソングライターのさだまさしさんが設立した公益財団法人「風に立つライオン基金」の顕彰事業「風に立つライオン・オブ・ザ・イヤー」の贈賞式が行われた。同賞は、国内外で命や平和を守るために献身的に活動している日本人や日本の団体を表彰するもの。一般社団法人「モザンビークのいのちをつなぐ会」代表理事の榎本恵さん、医療法人双樹会よしき往診クリニック院長の守上佳樹さんが受賞した。(11.14 10階ホール)

■日本新聞協会地域貢献大賞表彰式
日本新聞協会は地域貢献に優れた活動をした新聞販売店・スタッフに贈る2023年の「地域貢献大賞」の表彰式を開いた。大賞には静岡県藤枝市内の新聞販売店全5社による「新聞販売店バイク車載カメラ見守り」が選ばれた。そのほか東奥日報稲垣販売店、河北新報矢本販売所など7件が地域貢献賞を受賞した。(11.16 10階ホール)

■放送人政治懇話会
テレビ・ラジオ局の現役・OBらによる勉強会。泉健太 立憲民主党代表(11.1)、矢田稚子 内閣総理大臣補佐官(11.8)、齋藤健 前法務大臣(11.15)、馬場伸幸 日本維新の会代表(11.22)、古屋圭司 自民党憲法改正実現本部長(11.29)をゲストに招いた。

■新聞通信調査会定例講演会
共同通信社外信部記者の大熊雄一郎氏を講師に招き「中国外交と政治の今」と題した講演会を行った。(11.29 9階会見場)

レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 師走会席（12/28まで）

前菜：柚子香る豆腐、鶏の治部煮など お椀：牡蠣のみぞれ椀 造り：三種盛り 焼物：豚ヒレ西京漬け 煮物：冬蕪と茄子 利久煮 揚物：海老とアンコウ 変わり揚げ 食事：とろろ蕎麦 水菓子：季節の物（5,500円）（板長：加賀谷純）

洋食 季節のおすすめコース（12/28まで）

シーフードマリネ サラダ仕立て、かぼちゃのクリームスープ、牛フィレ肉のグリル 西洋わさびソース、チョコレートケーキ＆プチフルーツ盛り合わせ、コーヒーまたは紅茶、パンまたはライス（4,400円）。ランチ、ディナーともにご提供します。（シェフ：佐藤和治）

忘年会、新年会 宴会プラン 1月31日まで

年末年始の会合にお使いいただける宴会プランを用意しました。スモークサーモンのサラダ仕立て、チキングリル、白身魚のポワレなど9品をご提供します。お一人3,300円（税込み）です。550円の追加でアラスカ特製野菜カレー、1,430円の追加でフリードリンク（2時間）をお付けできます。別途、部屋代がかかります。予約、お問い合わせは03－3503－2724まで。

HP情報 https://www.jnpc.or.jp/

■会見詳録 会見の文字記録

●シリーズ「生成AI」② 酒井邦嘉・東京大学大学院教授（10.11） 言語脳科学が専門の酒井さんが生成AIの開発・利用が広がる現状に警鐘を鳴らしました。

■音声アーカイブ 会見の音声録音

●生田正治さん、キッシンジャーさん

先月死去した生田正治元日本郵政公社総裁、ヘンリー・キッシンジャー元米国務長官は当クラブで会見しています。生田さんは2回登壇、そのうち2003年5月に日本郵政公社総裁就任1カ月後に会見したときの音声を、キッシンジャーさんは3回登壇、そのうち1972年6月に大統領補佐官として会見したときの音声を公開しています。

■山田太一さん 会見動画があります

先月死去した脚本家の山田太一さんの会見（「戦後70年 語る・問う」2014年11月）の動画と詳録も公開しています。「マイナスを遠ざけ、忌避しようとする現代社会にあって、マイナス部分を書き入れた人間を描くことこそテレビドラマの役割だ」と語りました。

新しい事務局スタッフ 自己紹介

西村志織です

11月より新しく事務局スタッフとして勤務することになりました西村志織（にしむら・しおり）と申します。出身は沖縄県で、東京の大学を卒業後、沖縄県の地方紙で7年間、記者をしておりました。記者時代は沖縄県内の基地被害や沖縄戦などに関心を持って取材をしておりました。沖縄を離れ、今年の夏に東京に来ました。満員電車にまだまだ慣れないですが、通勤のお供には大好きな安室奈美恵さんの曲を聴いて乗りきっています。

事務局では主に会報を担当します。記者の皆さまの取材の支えに少しでもなれるような情報発信に努めてまいりますので、これからどうぞよろしくお願いいたします。

＜法人代表変更＞

・東奥日報社

鎌田伸寿 東京支社長兼営業部専任部長・総務部専任部長兼大阪支社長兼営業部専任部長（旧 松林拓司氏）

■訃報

林雅夫会員（日本放送協会出身、97歳）が10月18日に死去されました。ご冥福をお祈りいたします。

今後の行事予定（12/1現在）

21㈭	14：00～15：15 10階ホール 神田眞人 財務省財務官 会見
22㈮	17：30～19：05 10階ホール 試写会「その鼓動に耳をあてよ」
1月 16㈫	14：00～15：30 9階会見場 「大学どこへ」④ 高橋裕子 津田塾大学学長
22㈪	14：00～15：30 10階ホール 「大学どこへ」⑤ 大庭良介 筑波大学准教授
	16：30～17：30 10階ホール メリッサ・パーク 核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）事務局長 会見
30㈫	13：30～15：00 9階会見場 「大学どこへ」⑥ 杉山直 名古屋大学総長

年末年始 閉室のお知らせ

レストラン、ラウンジの年内営業は12月28日（木）までです。事務局も12月29日（金）から1月3日（水）まで閉室いたします。新年は1月4日（木）から、事務局、ラウンジ、レストランとも平常通りオープンします。

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン（9階）……☎3503-2723
- 洋食レストラン（10階）……☎3503-2766
- 貸室予約、宴会打ち合わせ…☎3503-2724
- 受 付……☎3503-2721
- 会員事務……☎3503-2727
- 経 理……☎3503-2728
- クラブ行事への申し込み…☎3503-2722
- 会見申し込みアドレス…kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

●法人会員：127社 ●基本会員：720人 ●個人会員：1,054人
●法人・個人賛助会員：53社・115人 ●特別賛助会員：94人
●名誉・功労会員：13人 ●学生会員：47人 計180社・2,043人

会報委員会

委員長＝榊原 智
委 員＝稲澤 裕子 大石 卓見 勝田 洋人 倉重 篤郎 佐藤 庄太 志賀 英樹 二村 伸 萩原 豊 水野 雅央 本橋 春紀
（事務局：本庄五月 杉本翔一 西村志織）
☎03-3503-2754 FAX 03-3503-7271

写真回廊

撮影：石井　健（共同通信社中国総局）



中国四川省のジャイアントパンダ保護研究センターの雅安碧峰峡基地で報道陣に公開されたシャンシャン＝11月７日

力を抜いていこうよ

誠に月並みすぎる表現で申し訳ないが、やはり、かわいい。見るだけで癒される。世界がこのかわいさを知ったのはそう遠い昔ではない。１９３６年に米国の女性探検家が中国から持ち帰り、パンダのブームは始まる。かわいさの力を知った中国は、外交カードとしてパンダを使う。日中戦争が続き日米開戦にも至った１９４１年、蒋介石政権は米国にパンダ１対を贈る。ニクソン大統領の電撃訪中、田中角栄首相による日中国交回復の際にもパンダは活躍した。今、世界の約20もの国と地域の動物園に約70頭のパンダが暮らしている。その中でも、複数の動物園でパンダを見られたのは、日本と米国だけだ。中国の日米へのまなざしがわかる。しかし、米中相克の中、米国のパンダは貸与期間の終了で来年は半世紀ぶりに不在となる事態が取り沙汰された。パンダから見える外交史である。

私のパンダ体験は86年12月１日にさかのぼる。警視庁７方面担当（拠点は本所署）に着任したその日、赤ちゃんパンダの名前が「トントン」に決まり、「パンダ番」の先輩記者の取材を応援した。「パンダだけは抜かれるな」。各社の社会部に厳然としてあった圧力に、若い「パンダ番」記者たちは苦しんだと思う。舞台がどこであれ、懐妊や出産を追う取材はしんどいものだ。２０１２年７月、24年ぶりに日本で４頭目として生まれた赤ちゃんは生後まもなく亡くなった。それを知らずに「元気にすくすく」と書いてしまった新聞もあった。かわいさは時に罪つくりとなる。

中国に帰ってもシャンシャンは相変わらず人気だ。シャンシャン愛の44歳男性は５年間撮影を続け写真集まで出した。「パンダメンタル」なる言葉も生まれ、そのまま題名にした本もある。外交の手練れの演者でもあったパンダは、こころの時代の今、新しい役どころを見つけたようだ。

（毎日新聞出身　小川　一）